

優秀賞 大分県 岩本 梨沙 様 (20代 女性)

私は高校時代から心と身体のバランスを崩し、高校を卒業してすぐに行った精神科で統合失調症と診断されました。それから私の人生は百八十度変わりました。目指していた夢も何もかも捨てざるを得なくなり、初診の時に閉鎖病棟への入院を勧められ、結果的に十九歳から二十一歳まで入退院を繰り返すことになりました。

あとから家族に聞いた話なのですが、個室だった上、薬もたくさん飲まなければならず、治療の一環で作業療法活動にも参加していて、入院費、治療費は家計を圧迫するほどだったそうです。

そんな中で、ケースワーカーの方から教えていただいたのが、障害基礎年金だったそうで、私の場合は十八歳の時に初診でしたので、年金の加入に関係なく、二十歳前傷病というのにあてはまるので二十歳になってすぐに障害年金という年金を受け取ることができるかと教えてくださったそうです。

結局、十九歳から二十一歳までに三回、通算で一年半程入院したのですが、年金のお陰で無事に入院費をまかなうことができました。

二十一歳で退院をしてからも、しばらくは自宅療養となり、働くことができなかったため、障害年金は私の収入源となりました。

その後、自宅療養の甲斐もあり、二十四歳で作業所へ通所できるまでに回復したのですが、作業所の工賃は一時間たったの百八十円でした。これではとても生活していきません。

作業所に通所していた時に、もっと働いてみたい。作業所ではなく、一般企業の障害者枠で働いてみたいと思うようになりました。私たち精神障害者にとって、働くということは生きる希望なのです。社会に出るということは夢なのです。でもその希望や夢を手にするためには、いくつもの問題があります。その中で最も大事なことが「無理なく働くことができるのかどうか」です。そこには年金をいただいているかが大きく関係してきます。

私は年金をいただいているので無理してフルタイムで働かず、パートとして働く道を選ぶことができました。今は週三日、一日五時間のパートで働いています。

年金がなければ、いくら実家暮らしといっても親に気を遣ったり、心の充実はできなかったと思いますし、何よりここまで回復できなかったと思います。年金のお陰で、リハビリ期間中にカラオケに行くことができたり、母とランチへ行くことができ、家の中にこもらず外へ行くきっかけができました。外の世界の楽しさにも気付くことができました。

今は三歳と一歳の姪に誕生日プレゼントをあげることもできます。普通に働くことができない、普通の生活が送れないとわかった時には将来への不安も大きかったのですが、年金をもらうことで、少なくとも生活には困らないので本当に助かっています。

年金は私たちにとって一定レベルの生活を送ることができるパスポートのような存在です。前を向く力をくれた年金には本当に感謝しています。